

【2】 仏伝経典

[1] 上記のような目的のもとに（ただし【1】の[1-2]の(4)を除く）作成された文献資料が過去にないわけではない。現代的な研究を除けば「仏伝経典」と呼ばれるものがそれに相当する。これらも原始仏教聖典を主な材料として「釈尊の生涯」や「教団形成史」を再構築しようとしたものといえることができるが、今となってみれば、そのカバーする範囲と厳密性において不十分きわまりないものである。

とはいいながら本研究においても、これらを資料の1つとして組み込まざるをえない場合も生じるから、その評価も含めてこれら「仏伝経典」を一瞥しておきたい。

[1-1] 「仏伝経典」の多くは、その構成において2部に分けることができる。第1部は釈尊の出家までの事績を記す部分であって、前世の物語も含まれる。第2部は成道以降の事績であって、入滅や入滅後の葬儀、結集まで触れられるものもある。いわば第1部は「仏教」成立以前の事績であり、第2部は「仏教」成立以降の事績であるといえることができる。

原始仏教聖典は釈尊の成道以降の記事を記したものであって、釈尊の45年間の教化活動が主題となっている。したがって「仏伝経典」の第1部はほとんどが原始仏教聖典を材料としていないといえることができる。それらは神話・伝説というべきものであって、おそらく後世になって作られたものである。例えば四門出遊さえも原始聖典資料には存在しないから、そういう意味では神話伝説の部類に属するものと評しなければならない。

本研究は「原始仏教聖典」を材料とするのであるから、「仏伝経典」の柱の1つである出家までの事績はほとんど触れることはない。「原始仏教聖典」を材料とするかぎり、「原始仏教聖典」が記録していないものを扱うことはできないからである。

「仏伝経典」の第2部は釈尊の成道以降を主題とする部分であるから、原始仏教聖典の扱うものと重なる。したがってまた必然的に本研究とも重なることになる。後述するように、「仏伝経典」も「原始仏教聖典」資料を材料として製作されたものであるから当然のことである。しかしこれら「仏伝経典」が材料とした原始聖典は膨大な量に上る「原始仏教聖典」群のなかのほんの一握りの資料であって、本研究の規模と精密度において比較することができないほど不十分であると評さなければならない。

次項で詳説するように「仏伝経典」の第2部の中心とする記事は成道直後から舍利弗・目連の帰仏、せいぜい釈迦族の教化までであるが、これらの記事は「律蔵」の『受戒犍度』を材料としたものである。「仏伝経典」のあるものはこれに釈尊の入滅の場面（アンバパーリーの帰信から第1結集まで）を付加するが、それはいうまでもなく『大般涅槃経』からその材料を取ったのである。この他に「律蔵」の『臥坐具犍度』によって給孤独長者の寄進と祇園精舎の寄進記事を、『破僧犍度』によってデーヴァダッタ（Devadatta 提婆達多）やアヌルッタ（Anuruddha 阿那律）らの出家とデーヴァダッタの破僧事件を付加している「仏伝経典」もあるが、それらは記事が豊富な部類に属する「仏伝」と云わなければならない。その他の聖典資料を使っているものもないではないが、断片的であって、釈尊の生涯の再現というにはほど遠い。

[1-2] 以下に成道以降の釈尊の行状を仏伝経典がカバーしている範囲を簡単に示しておく。経名の後に示した数字は、「仏伝経典」の第1部と第2部を合わせた全体のページ数に

対して、第2部（釈尊成道以降の行状を記す部分）の占める割合である（(2)と(3)は「仏伝経典」というよりは、アヴァダーナであるから、仏伝の部分はごくわずかである。したがってこの数字は記さなかった。典拠としている文献は注を参照されたい。なお、漢訳の翻訳年は「仏書解説大辞典」の解説によった）。また上記の『受戒韃度』『大般涅槃経』『臥坐具韃度』『破僧韃度』など以外の材料を使った事項にはアンダーラインを施しておいた。

(1) “Nidānakathā” (Jātaka-aṭṭhakathāの一部) 20頁/93頁⁽¹⁾

成道（ヴェーサーカ月の満月の日=2/15。インド暦と漢訳暦の対応については【論文2】を参照されたい）……菩提樹下の禪定（7・7日）……2賈客の供養……梵天勸請……ウパカと出会う……初転法輪（アースール八月の満月の日=4/15。続いて雨安居=4/16~7/15）……ヤサと54人の友人の教化……ウルヴェーラーへ……賢衆30人の教化……（弟子たちを諸方へ布教に出す）……3迦葉の教化（3ヶ月）……ビンピサーラ王の帰信（プッサ月の満月の日=10/15。2ヶ月）……竹林園の寄進……舎利弗・目連の出家……迦留陀夷の出家……釈迦族の教化（パググナ月の満月の日=12/15に出発して、2ヶ月を要して到着。難陀・ラーフラの出家）……王舎城へ……給孤独長者の帰信……祇園精舎の寄進を受ける

(2) 『仏本行集経』60巻 隋 闍那崛多（普通4~開皇20 523~600）訳⁽²⁾

成道（2/23）……菩提樹下の禪定……龍の帰信……2賈客の供養……梵天勸請……優波伽摩と出会う……初転法輪……耶輪陀と50人の友人の教化……富楼那と29人の友人の出家……大迦旃延の出家……娑毘耶の出家（鹿野苑にて6/16~9/15まで安居）……兵将の教化……3迦葉の教化……優波斯那の教化……頻頭娑羅王の帰信……竹林園の寄進……大迦葉の出家と囑累……跋陀羅夫婦の出家……舎利弗・目連の出家……マガダ国に非難起こる……布薩の制定……尸棄仏の本生……（迦毘羅婆蘇都へ）……優陀夷の因縁……優波離の因縁……羅睺羅=6年胎にあり、年6歳。あるいは生まれて2年後釈尊出家、苦行6年、成道7歳に迦毘羅へ帰城して15歳。あるいは成道後12年=の出家……難陀の出家……提婆達多・阿難・摩尼婁陀等の出家……摩尼婁陀の因縁……阿難の因縁

(3) “Mahāvastu”⁽³⁾

成道……2賈客の供養……梵天勸請……ウパカと出会う……初転法輪……30人の友人たちの出家……3迦葉の出家……ビンピサーラ王の帰信……舎利弗・目連の出家……大迦葉の出家……500人の商人……釈迦族の教化（“Mahāvastu”は必ずしも仏伝経典ではない。したがって釈尊の生涯の順序には編集されていないので、筆者が仏伝に関わる部分のみを並べ変えた。またジャータカおよびこれに類するものは省略した）

(4) 『普曜経』8巻 西晋（永嘉2 308）竺法護訳 80段/166段⁽⁴⁾

成道……菩提樹下の禪定……2賈客の供養……梵天勸請……初転法輪……3迦葉の教化……瓶沙王の帰信……竹林園の寄進……舎利弗・目連の出家……（得道已来6年、出家已来12年）優陀耶の出家……釈迦族の教化（難陀、羅云=7歳の出家）……大迦葉・阿難・弥勒菩薩への囑累

(5) 『方广大莊嚴経』12巻 唐（永淳2 683）地婆訶羅訳 68段/236段⁽⁵⁾

成道……菩提樹下の禪定（7・7日）……2賈客の供養……梵天勸請……阿字婆と出会う……初転法輪……3迦葉の教化……頻婆娑羅王の帰信……竹園の寄進……舍利弗・目連の出家……（得道已来6年、出家已来12年）優陀夷の出家……釈迦族の教化（難陀、羅睺羅＝7歳の出家）……弥勒菩薩・大迦葉・阿難への嘱累

(6) “Buddhacarita” (Skt.+Tib.) 176頁/328頁⁽⁶⁾

成道……ウパカに出会う……初転法輪……ヤシヤスと54人の友人の教化……（弟子たちを諸方へ布教に出す）……3迦葉の教化……ビンピサーラ王の帰信……竹林の寄進……舍利弗・目連の出家……大迦葉の出家……給孤独長者帰信して舎衛城に招待す……（伽維羅衛城へ）……釈迦族の教化（阿難陀・難陀・提婆達多等の出家）……（舎衛城へ）……祇園精舎の寄進……波斯匿王と会見……天上にて母のために説法（雨期を過ごす）……ジーヴァカ・アングリマーラ等の教化（項目のみ）……提婆達多の破僧……アムラパーリー園林を寄進……（夏安居を終わって）3月後に涅槃するとの宣言……チュンダの供養……スバドラの出家……入涅槃……分舍利……結集

(7) 『仏所行讚』5巻 馬鳴菩薩造 北涼（玄始3～15 414～426）曇無讖訳 85段/162段⁽⁷⁾

成道……菩提樹下の禪定……梵天勸請……商人の供養……憂波迦に出会う……初転法輪……耶舎と54人の友人の教化……（弟子たちを諸方へ布教に出す）……3迦葉の教化……瓶沙王の帰信……竹林園の寄進……舍利弗・目連の出家……大迦葉の出家……給孤独長者帰信して舎衛城に招待す……（伽維羅衛城へ）……釈迦族の教化（阿難陀・難陀等の出家）……（憍薩羅国へ）……祇園精舎の寄進……波斯匿王と会見……切利天において母のために説法（安居を過ごす）……耆婆・央瞿利摩羅等の教化（項目のみ）……提婆達多破僧……菴摩羅女園林を寄進……（夏安居を終わって）3月後に涅槃するとの宣言……純陀の供養……跋陀羅の出家……入涅槃……分舍利……結集

(8) 『修行本起経』2巻 後漢（建安2 197）竺大力共康孟詳訳 3段/35段⁽⁸⁾

成道（4/8）……2賈客の帰信

(9) 『中本起経』2巻 後漢（建安12 207）曇果共康孟詳訳 49段/49段⁽⁹⁾

成道2賈客の教化……梵天勸請……優呶に出会う……初転法輪……蛇蛇（宝称）と4人の親友と50人の友人の教化……大衆（30人の青年に相当する）の教化……難陀女と難陀波羅女の帰信……3迦葉の教化……瓶沙王の帰信……竹林園の寄進……舍利弗・目連の出家……優陀耶の出家……（伽維羅越国へ）……釈迦族の教化（調達）……（王舎国へ）……須達の帰信……舍利弗を先遣す……祇樹給孤独園の寄進……拘藍尼国の瞿師羅（美言）の帰信……優填王の夫人該容の帰信……（伽維羅越国にて）瞿曇弥比丘尼となることを願う（避雨3月）……（舎衛国にて）末利夫人とともに波斯匿王を教化す……大迦葉釈尊と会見す……（維耶離にて）阿凡和利（Ambapāli）の帰信……尼鍵問疑品……（随蘭然にて雨安居して）仏食馬麦品

(10) 『太子瑞応本起経』2巻 呉（黄武2～建興2 223～253）支謙訳 16段/32段⁽¹⁰⁾

成道……龍の帰信……梵天勸請……初転法輪……3迦葉の教化

(11) 『異出菩薩本起経』1巻 西晋（太康初～永嘉末 280～312）聶道真訳 3段/

11段⁽¹¹⁾

成道……菩提樹下の禪定……龍の帰信……初転法輪……3迦葉の教化

(12) 『仏説十二遊経』1巻 東晋(太元17 392) 迦留陀伽訳 2段/5段⁽¹²⁾

成道(4/8)……菩提樹下の禪定(7/15まで。1年)……初転法輪……畢婆般等のための説法・迦者羅等17人のための説法・大才長者及二才念優婆夷のための説法・正念尼犍のための説法・提和竭羅仏時42人のための説法(以上2年)……3迦葉の教化(3年)……象頭山上での龍鬼神のための説法(4年)……竹林園での私呵味のための説法(5年)……舍利弗・目連の出家……祇樹給孤独園の寄進(6年)……拘耶尼国での婆陀和菩薩等8人のために般舟経を説く(7年)……柳山中にて屯真陀羅王弟のための説法(8年)……穢沢中にて陀崛摩のための説法(9年)……摩竭国に還つて弗迦沙王のための説法(10年)……恐懼樹下で弥勒のために本起を説く(11年)……釈迦族の教化、波斯匿王のための説法(12年)(本経は項目のみで詳しい記事はない)

(13) 『仏本行経(一名仏本行讃伝)』7巻 宋(元嘉年中 424~453) 釋宝雲訳 111段/183段⁽¹³⁾

成道……初転法輪……宝称(Yasa)と50人の童子の教化……(弟子たちを諸方へ布教に出す)……3迦葉の教化……瓶沙王の帰信……舍利弗・目連の出家……葉樹生(Mahākassapa)の出家……須達の帰信……勇猛・耆域・鸯掘魔等の教化(項目のみ)……大神変品……[梵天勧請……2賈客の供養……尼犍に出会う……初転法輪]……切利宮にて母のために説法……憶先品……捺女(Ambapālī)の帰信……歎定光仏品……調達の破仏……3月後の入滅の宣言……調達入地獄品……諸力士の教化……須跋の出家……入涅槃……分舍利

(14) 『過去現在因果経』4巻 劉宋(元嘉21~30 444~453) 求那跋陀羅訳 37段/99段⁽¹⁴⁾

成道(2/8)……菩提樹下の禪定……梵天勧請……2賈客の供養……優波伽と出会う……初転法輪……耶舎と50人の長者子の教化……(弟子たちを諸方へ布教に出す)……3迦葉の教化……頻毘娑羅王の帰信……竹園の寄進……舍利弗・目連の出家……大迦葉の出家

(15) 『衆許摩訶帝経』13巻 宋(雍熙2~淳化5 985~994) 法賢訳 75段/132段⁽¹⁵⁾

成道……菩提樹下の禪定……2賈客の供養……梵天勧請……烏波譏と出会う……初転法輪……耶舎とその4兄弟と50人の友人の教化……(弟子たちを諸方へ布教に出す)……60賢衆の教化……難那とその長女の帰信……3迦葉の教化……民弥婆囉王の帰信……迦蘭陀竹林園の寄進……給孤独長者の舎衛城への招待……舍利弗を先遣す……祇園精舎の寄進……烏那曳曩(Kāḷudāyī)使者となる……目連を先遣す……釈迦族の教化(阿爾嚙駄・提婆達多・烏波梨らの出家)

(1) “Jātaka” vol. I pp.047~094 国訳に「南伝大蔵経」28巻 pp.101~203

(2) 大正03 p.655上~

(3) Emile Senart; “Le Mahāvastu” 3 vols. Paris, 1882 1890 1897 (rep.名著普及会 昭和5

- 2)。翻訳に“The Mahāvastu” vol.III translated by J.J.Jones, 1956がある。
- (4) 大正03 p.483上～ この系統の伝には次の『大莊嚴經』と“Lalitavistara”がある。
 “Lalitavistara”はまだ翻訳研究が進んでいないので、本稿では省略した。ただしその前半部分は外蘭幸一『ラリタヴィスタラの研究 上巻』のなかに和訳されている。大東出版社 平成6年2月 テキストにはR.Mitra ; “Lalitavistala or Memoirs of the early Life of Sakya Siṃha” Calcutta , 1858 1877 , S.Lefmann ; “Lalitavistara , Leben und Lehre des Śākya-buddha” 2 vols. Halle , 1902 1908 , P.L.Vaidya ; “Lalitavistara” (BST. No.1) Darbhanga , 1958
- (5) 大正03 p.539上～
- (6) 梶山雄一・小林信彦・立川武蔵・御牧克美訳『ブツダチャリタ』「原始仏典10」講談社 昭和60年12月によった。日本語訳としては他に、平等通昭『梵詩邦訳 仏陀の生涯』印度学研究所 昭43年、同『梵詩邦訳 仏陀の生涯 後篇』昭和44年、原実訳『ブツダ・チャリタ』「大乘経典13」中央公論社 昭和49年1月がある。テキストには、S.Levi “Le Buddhacarita d’Aśvaghōṣa” Paris,1892.(chap.1) 、 E.B.Cowell “The Buddhacarita of Aśvaghōṣa” Anecdota Oxoniensia, Oxf.,1893.(17章まで)、 E.H.Johnston “The Buddhacarita or Acts by the Buddha.” pt.1, Calcutta,1935. (chap.14まで)、 G.Tokiwai “The Buddhacarita of Aśvaghōṣa in Roman Characters with a Chinese translation” 3vols.,1911-21.(chap.14まで)、 Sri Ramacandradas Shastri “Buddhacaritam “Prakāśa”” Hindiviyakhyopetam Vidyabhavan Sanskrit granthāmala.,1966,2vols. (chap.14 まで)等がある。
- (7) 大正04 p.001上～
- (8) 大正03 p.461上～
- (9) 大正04 p.147下～
- (10) 大正03 p.472下～
- (11) 大正03 p.617中～
- (12) 大正04 p.146上～
- (13) 大正04 p.054下～
- (14) 大正03 p.620下～
- (15) 大正03 p.932上～

[1-3] このように「伝経典」の内容とする「釈尊の生涯」と「釈尊教団形成史」は貧弱なものであって、とても釈尊の布教活動の全体をカバーしているとはいえない。その資料とした原始仏教聖典も、「律蔵」の『受戒犍度』『臥坐具犍度』『破僧犍度』と『大般涅槃經』などほんの少数を使ったに過ぎない。これ以外の材料を使った部分（すなわちアンダーラインを施した部分）は少ない。一目して判るようにこれを図示してみると次のようになる。「その他」欄はその他材料を使った部分であるが、すべてを表示できないので、主な事項のみに限った。

経番	受戒犍度	臥具犍度	破僧犍度	涅槃經	その他
1	○	○			
2	○		○		大迦葉の出家、布薩の制定
3	○				大迦葉の出家
4	○				大迦葉・阿難への囑累

5	○				大迦葉・阿難への囑累
6	○	○	○	○	天上での説法、ジーヴァカ・アングリマーラの教化
7	○	○	○	○	天上での説法、ジーヴァカ・アングリマーラの教化
8	○				
9	○	○			優填王夫人の帰信、マハーゴータミーの出家、仏馬食
10	○				
11	○				
12	○	○			波斯匿王への説法
13	○	○	○	○	大迦葉の出家、天上での説法
14	○				大迦葉の出家
15	○	○	○		

[2] 以上のように仏伝経典は「律蔵」の『受戒犍度』を根幹にし、いくつかの仏伝はこれに『臥坐具犍度』『破僧犍度』『涅槃経』の材料を付加し、さらに少数はこの外の資料を付加したものにすぎないのであるが、これらがいかに釈尊の伝記として不完全なものであるかを具体的に述べてみよう。

[2-1] “Nidānakathā”によると、『受戒犍度』の仏伝部分の最後の記事である釈尊が釈迦国に帰られたのは成道からちょうど1年目の2月15日であったとする。これに基づく限り釈迦族の教化で終わっている仏伝、あるいはそれ以前で終わっている仏伝（例えば③⑧⑩⑪⑭）。大迦葉・阿難への囑累は明らかに付け足しであるからこれを含めると④⑤も）は、釈尊の教化活動45年間中のたった1年間しかカバーしていないことになる。

もっとも『普曜経』『方广大莊嚴経』は釈迦族の教化を出家12年、成道6年とし、『仏説十二遊経』は成道12年とし、『仏本行集経』は6年、7年、12年の異説を掲げている。このうちのどれが正しいかわからないが、“Nidānakathā”の成道満1年目よりは蓋然性が高いであろう。しかし例えばこれを成道12年とすると、一方ではこの12年間の釈尊の業績の記事としては余りに貧弱であるという譏りを免れないことになる⁽¹⁾。

また“Buddhacarita”『仏所行讚』『仏本行経』はアンバパーリーの教化以降、入滅・分舍利あるいは結集までを『般涅槃経』によってカバーしているが、これは釈尊の最晩年の1年間弱を描いたものにすぎないから、これも45年間の教化活動のほんの1部分であることに変わりがない。

また祇園精舎の建設や提婆達多の破僧が延べ何年間にわたったものであるかは判らないが、これをもって釈尊45年間の教化活動のどれだけをカバーしているかは議論する必要もないであろう。しかもこれらが釈尊の生涯のどの時点のことであったかを伝えていないことは致命的である。提婆達多の破僧事件は、釈尊が老年に達したからサンガを自分に委ねよと要求したのであるから、順序としては祇園精舎の寄進よりも後のことと推定できる。「仏伝経典」

の製作者たちは、「仏伝」を書くに足らない記事が決定的に不足しているため、これらを取りあえず利用したというに過ぎないであろう。祇園精舎の寄進と提婆達多の破僧にしてそうであるから、他の聖典材料を用いた記事は推して知るべきである。

このように仏伝経典が上記のような聖典資料を主な材料とするかぎり、そのカバーする期間はほんの数年間であると言わなければならない。

- (1) 増谷文雄博士は、「律蔵、大品、第1、大鍵度の前半のそれは、菩提樹下の正覚より初めて、梵天勸請、初転法輪、伝道の宣言、カッサバ(迦葉)3兄弟の教化、ピンピサーラ(頻毘娑羅)王の帰依などを経て、サーリプッタ(舎利弗)、モッガラーナ(目犍連)の帰投と、ラージャガハ(王舎城)の不穏をもって結んでいる。それらは、仏陀の生涯のなかでもっとも重要な時期であるが、その期間は、おそらく、数ヶ月を出でぬものであろうと考えられる」としている。『増谷文雄著作集5』角川書店 昭和56年6月 pp.340~341

[2-2] また『破僧鍵度』は提婆達多の破僧をテーマとしたものであり、『臥坐具鍵度』は臥坐具や精舎に関する諸規定をテーマとするもので、その1部として給孤独長者の祇園精舎の寄進を扱ったものであるが、両者ともそれぞれが主題とする事項を描くことを目的としたもので、ある一定期間の釈尊の言行録を満遍なく伝えようとしたものではない。したがってこれらがたとい数年間にまたがっていると、これらを積み重ねて「仏伝」ができるというものではない。

特定のテーマに基づいて作られているという意味では「受戒鍵度」も同様である。これは成道直後という特定の時点を示すという意味では貴重な資料であるが、白四羯磨による受戒作法がどのような因縁によって制定されるに至ったかを描こうとしたことが、図らずも貴重な「仏伝」資料になったというに過ぎない。したがってここに釈尊の言行の全般が伝えられているということはいえない。

これに対して「涅槃経」は釈尊の入滅という生涯最後の事件を伝えるということ自体がテーマであったから、あるいは釈尊の最晩年の全般にわたる言行の相当部分をカバーしている可能性があるかもしれない。しかしそれはあくまでも釈尊個人の言行録であって、釈尊が指導していた教団全般にわたるものではない。すなわち「律蔵」的な要素はすっぽりと欠落しているといえる。

このようにこれらは特定のテーマに関わる事柄のみについての伝承なのであるから、それらが数年間の出来事を記録するとしても、またその期間が釈尊の特定の時点であることを示すとしても、釈尊の行状全体を伝えようとしたものではないということを考えれば、これらを資料として釈尊伝を再構築したとしても、釈尊の生涯のごく1部しかカバーしえないことは明らかである。

[2-3] 以上のように「仏伝経典」は「受戒鍵度」などほんの2、3の原始聖典資料を材料としたものに過ぎず、しかもそれらとて十分な釈尊伝材料ではなかったわけであるが、釈尊の生涯の特定の時点を示す形で残されたものがこれらしかなかったため、いわば「お手軽」にそれらを使って釈尊伝を構築したに過ぎないといわなければならない。

前項の表にアンダーラインを施した事項は、上記の材料に含まれていない事項でその数はわずかである。もちろん原始経典に材料を求めているのであるが、これについてはその材料となった原始経典を示したうえで、諸仏伝を対照させたより詳しい対照表を作成して、続刊

の本「モノグラフ」シリーズに掲載する予定である。したがってここではその細かな議論は省略するが、「仏伝経典」ではそれらを釈尊の生涯に沿って時系列に並べたというよりは、単に羅列したというほうが実態に近い。

[3] 「仏伝経典」は釈尊の伝記を伝える貴重な資料であるが、その前半部分たる第1部は神話・伝説に彩られたもので、現代的な意味での「釈尊伝」ということはできない。後半部分の第2部が我々のいう「釈尊伝」に相当するが、そのカバーする範囲は釈尊の生涯のほんの1部分で、その情報量は決定的に不足している。またこれらは原始仏教聖典にその材料を求めてはいるものの、その利用している数はほんの一握りに過ぎず、膨大な原始聖典材料は利用されずに放置されているといわなければならない。

律蔵資料があるから「経数」をうんぬんするのは難しいが、「犍度分」の1つ1つの「犍度」と「経分別」の1条1条をそれぞれ1経として数えると、本稿の末尾に示すように、本研究が原始仏教聖典資料として扱う経典数は漢巴合わせて13,031経に上る。これに対して上記の一般的な仏伝経典が材料として使っている「受戒犍度」「臥坐具犍度」「破僧犍度」「涅槃経」はパーリや諸漢訳資料を合計しても24経にすぎない。その割合は13,031経の1%にも満たないわずか0.18%である。これ以外の資料を用いている部分はしれたものであって、しかも単にエピソードを羅列したか、項目を掲げただけのものであって、「伝記」というにはほど遠い。原始仏教聖典は「仏伝経典」もそうしたように貴重な「仏伝資料」であるに拘らず、99%以上にも上る膨大な原始仏教聖典が放置されたまま、釈尊伝の再構築に活用されていないということになるわけである。

本研究が原始仏教聖典を資料として、前記のような目的をもって新たな研究を始めたのは、「仏伝経典」の仏伝では、そのカバーする範囲と精密度において満足できなかったからにほかならない。

[4] もちろん現代の学者の諸研究があり、それらは各種の言語資料の発見や学問方法論の飛躍的な発達により、その精度においては注目すべき成果を挙げている。しかし残念ながら大勢においては、「仏伝経典」を主な資料とせざるをえない段階であって、それほどの進展を見せていないといわなければならないであろう。（仏伝研究文献については、いずれ本「モノグラフ」シリーズにおいて紹介するつもりである）